



唐土我朝に、もろもろの智者達の、沙汰し申さるる観念の念にもあらざ。また学問をして、念のこころを悟りて申す念仏にもあらざ。ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申し、うたがひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候はず。ただし三心四修と申すことの候ふは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候ふなり。この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあはれみにはずれ、本願にもれ候ふべし。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の愚智のともがらに同じうして、智者のふるまひをせずしてただ一向に念仏すべし。

証のために両手印をもつてす。浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存全く別義を存ぜず、滅後の邪義をふせがんがために所存をしるし畢んぬ。

建暦二年正月二十三日 大師在御判

私の説いてきたお念仏は、み仏の教えを深く学んだ中国や日本の高僧の方が理解して説かれてきた、静めた心でみ仏のお姿を想い描く観念の念仏ではありません。また、み仏の教えを学びとることによって、お念仏の意味合いを深く理解した上でとる念仏でもありません。阿弥陀仏の極楽浄土へ往生を遂げるためには、ただひたすらに「南無阿弥陀仏」とおとなえるのです。一点の疑いもなく「必ず極楽浄土に往生するのだ」と思い定めておとなえるほかには、別になにもありません。ただし、お念仏をとる上では、三つの心構えと四つの態度が必要とされますが、それらさえもみなことごとく、「『南無阿弥陀仏』とおとなえて必ず往生するのだ」と思い定める中におのずとそなわって知るのであります。もし私が、このこと以外にお念仏の奥深い教えを知っているが隠しているというのであれば、あらゆる衆生を救おうとするお釈迦さまや阿弥陀さまのお慈悲にそむくことになり、私自身、阿弥陀さまの本願の救いから漏れおちてしまうことになりましょう。お念仏の教えを信じらる者たちは、たとえお釈迦さまが生涯をかけてお説きになったみ教えをしっかり学んだとしても、自分はその一節さえも知らない愚か者と自省し、出家とは名ばかりでただ髪を下ろしただけの人々が、仏の教えを学んでいなくとも心の底からお念仏をとなえているように、決して智慧あるもののふりをせず、ただひたすらお念仏をとなえなさい。

以上のことを証明し、み仏にお誓いするために私の両手を印としてこの一紙に判を押します。浄土宗における心の持ちようとの行のありかたを、この一紙にすべて極めました。私、源空の胸の内には、これ以外に異なつた理解は全くありません。私の滅後、間違つた見解が出てくるのを防ぐために、考えているところを記し終えました。

建暦二年正月二十三日（法然上人の御手印）

法然上人御教

上人やまとうたを事とし給はざりけ
れども、我國の風俗に隨て法門によせ
ては、ときどきおもひをのべられける
にや、或は門弟の中にするしをけるを
申つたへ、或はてづから書付給へるを後
後に披露しける

さへられぬ光もあるをきしなべて
へたてがほなるあさがすみかな

我はたゞ佛にいつかあふひくさ

ころのつまにかけぬ日ぞなき

阿彌陀佛にそむる心の色にいては

秋の梢のたくひならまし

雪のうち佛の御名を唱れば

つもれるつみぞやがてきえぬる

かりそめの色のゆかりの恋にだに

あふには身をも惜しみやはする

紫の戸にあけくれかゝる白雲を

いつかむらさきの色にみなさん

あみだ佛といふより外は津の国の

なにはのこともあしかりぬべし

極樂へつとめてはやくいでたゞば

身のをはりにはまいりつきなん

阿彌陀佛と心は面にうつせみの

もぬけはてたる声ぞすすしき

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

阿彌陀佛と十こゑ唱えてまどろまん

ながきねふりになりもこそぞれ

千とせふる小松のもとをすみかにて

思量寿佛のむかへをぞまつ

おほつかなたれかいひけんこまつとは

雲をさゝふるたかまつ枝

池の水人の心に似たりけり

にこりすむことさだめなければ

むまれてはまつ思ひ出てんふるさとに

契し友のふかきまことを

阿彌陀佛と申はかりきつとめにて

浄土の莊嚴見るぞうれしき

露の身はここかしこにてきえぬとも

ころはおなじ花のうてなぞ

生けらは念仏の功つもり

死なば浄土へ参りなん

とてもかくてもこの身には

思ひわつらふことぞなき

これを見んおりおりことに思ひて、

阿彌陀佛とつねにとなへよ

極樂もかくやあるらむあらたのし

とくまいらばや南無阿彌陀佛

いかにしてわれこくらくにむまるべき

みたのちかひのなきよなりせば

不浄にて申念佛のとかあらば

めしこめよかし彌陀の浄土へ